

配もまた差し違えを免れまい。悲しいことに、配所についても、世之介についても、具体的には何一つわかっていないのと同然なのである。「体験」そのものも、人によって異なるだろう。浅はかな主観的解釈だとする声が、どこからか聞えてきそうだ。

古い時代のことを肌で感じとるのはむづかしい。明治・大正や昭和初期でさえ、だんだんわかりにくくなってきている。文学の読み方などと、なまいきなことをいっているのではなく、もっと次元の低い話なのであるが、まんざら無関係でもないだろう。日用の器物一つにしても、自分で使った経験がないと、どうも実感をもってとらえにくい。文字でいくら詳細に説明されても、イメージの浮んでこないもどかしさはどうしようもない。挿絵や写真では五十歩百歩である。たまたま現物をみることでできたところで、せめてそれを使用した人々の生活環境くらいは、おおよそあたりに描き出せるのでなければ、眼の前の物も、所詮ただの標本に終わってしまう。ある程度わかると思うのが、かえって錯覚かもしれないのだ。不勉強を棚上げて、溜息をつくほかはない。

(一九七六・九・三〇)

小森さんを送る

里井 陸 郎

いつまでも黒髪のふさふさとした小森さんの若々しさはつねに羨望的であった。多分にこれは体質的なものだが、西鶴に肉迫する小森さんの粘着力に示されたような近世文学との格闘の中から、又、目立たぬおしゃれの隅々に凝らされた粹人の風格の中にも見られる一事をも忽にしない生きざまのしつこさからくるものであるような気がしてならない。小森さんのエネルギーは時々私の中に抵抗感を喚んだが、それ以上に、強烈な刺戟と影響力をのこしたのである。入試問題の季節に、小森さんの文学力と人間性は眼も鮮やかに展開した。かけがえのない貴重な存在であった。

ことばが単に観念でなくて、生きた物として実感されなければならないとする立場から一貫して西鶴を手もとに引きよせようとした研究者文学者だったところに、生粹の町衆小森さんの本質があり、すべてはその枝葉なのである。小森さんを送ることは淋しいだけでなく大きな損失である。